



特定非営利活動法人日本癌病態治療研究会 理事長
千葉大学 大学院医学研究院長・医学部長
千葉大学 大学院医学研究院 先端応用外科 教授

松原 久裕

昨年の巻頭言を完成した後、校正までに状況が変化したため、異例の巻頭言追補を追加しました。あれから1年が経過し、その当時は完全に収束しないまでもある程度落ち着いているかと思っていたCOVID-19の状況は、今年になって早々に2度目の緊急事態宣言発出、その後の解除を経て、4月になり再度まん延防止等重点措置が、大阪、東京などに適用される事態となっています。これまでになかった1日あたりの患者発生数で大阪が東京を抜き、現在1,000例を超える状況です。第4波とみられ、大阪の状況が東京へ波及することが危惧、予想されています。その原因としてウイルスの変異が想定されています。現在大阪において増加している英国型変異ウイルスと呼ばれているウイルスは、感染力、重症化が従来型より強いと考えられています。

一方で、イスラエル、英国においてはワクチン接種が進み、ワクチン接種によりCOVID-19の症状を抑えるだけでなく、感染も抑えることが明らかとなってきています。ワクチンに対する日本政府の対応の遅さが収束に灯りが見えない元凶です。折しも高齢者へのワクチン接種がようやく開始されましたが、その前に終了しているはずであり、終了していな

くはならないはずの医療従事者への接種が終わっていません。今回のパンデミックに対する反応から日本版CDCの設立が叫ばれ、準備が進んでいますが、世界で最も優れた感染対策がとれると信じられていた米国のCDCを持ってしても、国の方針を決定するリーダーが間違っていると抑止できないことはトランプ前大統領が証明しています。現在、1つの喫緊の課題は、開会式まで100日を切った東京オリンピック2020が開催できるかどうかです。先日、皆様のご支援により第121回日本外科学会定期学術集会を主催させていただきました。無事、終了し皆様に心より御礼申し上げます。その際に東京オリンピック2020事務局長の武藤敏郎氏に「COVID-19下の東京2020オリンピック・パラリンピックと日本の未来」というタイトルで特別講演を賜りました。その中で、「もし今年オリンピック開催ができなければ現実的に延期は不可能であり、中止となる。その時2022年に北京冬季オリンピックが開催され、コロナパンデミック後にそれを克服した最初のオリンピック開催が中国で行われることになる」と聞き、愕然としました。絶対にそんなことは許してはいけないと、以前からアスリートのために、ぜひ開催

してほしいと願っていましたが、改めて何としても東京オリンピックを開催してほしいと強く強く強く思いました。

外科学会定期学術集会を現地開催するため、昨年の秋頃に開催された現地開催も行う Hybrid の学会、研究会は可能な限り参加し、学問だけでなく、学会開催に関する情報収集に励みました。10月に土岐祐一郎大阪大学教授が世話人で開催された手術手技研究会は松江にて行われ、その熱い気持ちから Hybrid ではない現地開催のみでした。研究会自体もとても盛り上がり、討論も活発であり、たいへん楽しく参加できました。また、初めての松江訪問であり、松江城など久しぶりの旅情も堪能できました（写真）。

現在千葉県はまん延防止等重点措置も適用されておらず（この原稿を書いている内に千葉県にも適用される方向で検討が始まり東葛地区に適用されるようです）、比較的落ち着いた状況であり、千葉大学の入学式は学生のみでの参加ではありましたが、対面による式を開催できました。リモートで式の開催は可能ですが、実際に同じ時に入学した同級生と会って話ができる機会は、まったく異なる感情が芽生えると思われまます。

最も重要な本研究会に関しては、昨年の6月25、26日に前橋において調憲群馬大学大学院総合外科学講座肝胆膵外科学分野教授に当番世話人をお願いし開催予定だった「第29回日本癌病態治療研究会」が延期となりました。テーマは「がん研究の一隅を照らす」ということで、まさに一隅からその本質へ到達できるよ

うな展開を期待し、たいへん楽しみにしておりました。2021年1月14、15日に延期とし、現地開催を目指しましたが、11月に感染状況が改善しないため誌上開催とすることを調先生と相談の上、決定しました。調先生におかれてもたいへん残念で、苦渋の決断だったと思いますが、あきらめざるを得ない状況でした。振り返ってみると年末年始に感染者が爆発的に増大し、第3波を形成、2度目の緊急事態宣言が発出され、誌上開催の選択は極めて正しい選択であったと調先生の慧眼に敬服するとともに心より感謝申し上げる次第です。

今年の第30回研究会に関しては柴田昌彦福島県立医科大学地域包括的癌診療研究講座・消化管外科学講座教授に当番世話人をお願いしていますが、現在の状況からポスターセッションや一般演題、シンポジウムを中止し、web配信で6月11日に開催の予定となっています。対面で現地開催できないのは残念ですが、文明の力を駆使して記憶に残る意義のある会になると期待しています。

一方、会務として現在たいへん重要な課題は、財務状況がとても厳しい状態にあることです。その中で、本会はこの『W'Waves』という邦文誌と本会の重要な柱である英文誌『Annals of Cancer Research and Therapy』の2つの雑誌を発行しています。この2つの事業がたいへんな財政負担となっていることも事実です。一方で『Annals of Cancer Research and Therapy』をさらに発展させるため Pub Med への掲載を目指して

います。そのために電子投稿システム構築などを検討していますが、現在の財務状況では難しいと判断せざるを得ません。実現のためにこの『W*Waves』を休止ということも1つの選択肢ですが、現時点では紙媒体で発行しているためもあり、広告費という収入を生み出しているため休止してもそれほど大きな効果は生み出せません。今度の理事会で今後の方向性を決定したいと考えております。財務状況改善のためにも、本研究会のさらなる活性化のためにも、施設会員を増やす努力が必要であり、頑張っていきたいと思えます。また皆様におかれましても、ぜひともお知り合いの施設に関しまして施設会員へお誘いいただき様、切にお願い申し上げます。最後になりましたが、会員の皆様もくれぐれもご自愛下さい。

